

## マタイによる福音書17章 「へりくだりにある栄光」

### 1A 山頂の栄光 1-13

1B 御子に聞く命令 1-8

2B 先駆者への苦しみ 9-13

### 2A 麓の悪霊 14-21

1B 不信仰の時代 14-18

2B からし種ほどの信仰 19-20

### 3A ガリラヤへ 22-27

1B 人の子の死 22-23

2B イエスらしい納税 24-27

## 本文

マタイによる福音書 17 章を開いてください。私たちは今、ピリポ・カイサリアにいる弟子たちとイエス様との会話のところ、16 章のところまで来ました。イエス様が、「あなたがたは、わたしを誰だと言いますか？」と尋ね、ペテロが、「あなたは、生ける神の御子キリストです」と答えると、イエス様は、その告白を岩としてわたしの教会を建てると言われたのです。そうです、私たちはその教会となっています。そこに、これまでイエス様が宣べ伝えていた天の御国があり、地上で縛るものは天で縛られ、地上で解くものは天でも解かれるという権威が与えられています。けれども、イエス様はここから、はっきりとご自分が苦しみを受けることを語られました。ユダヤ人の指導者に裏切られ、死刑に処せられるが、三日目に甦ることを語られるのです。

このことは、ユダヤ人の弟子たちには受け入れがたいことでした。ローマという異邦人の支配を受け、虐げられている自分たちがおり、聖書が預言しているように、イスラエルのためにメシアはその権力を踏みにじってくださると信じていたからです。自分たちを救ってくださるはずなのに、どうして死ななければいけないのだということです。パウロは、キリストの十字架の言葉は、ギリシア人には愚かで、ユダヤ人にはつまずきだと言いましたが、弟子たちにとって受け入れ難いことだったのです。しかし、イエス様は、「わたしについて来たいのであれば、自分を否み、十字架を負って、それでわたしに付いてくるのです」と言われました。たとえ自分には、到底理解できないことであっても、それでも自分を横に退けて、父なる神の御心に従って生きることを選び取らないといけません。

そして、イエス様は御国が栄光と力を持ってくる時、その時に必ず報いが来ることを教えられました。今、苦しみを受け、迫害を受け、殉教するようなことがあっても、主が再び来られる時に、それぞれの行いに応じて報いてくださるのです。私たちが、どこに報いを期待するのか？に気を留めないといけません。そしてイエス様が言われました、「16:28 まことに、あなたがたに言います。ここ

に立っている人たちの中には、人の子が御国とともに来るのを見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」これを、イエス様が再臨される時として読めば、何のことだかさっぱり分からないのですが、答えはとても簡単です。17章がその続きで、イエス様は御国におけるご自分の栄光を、三人の弟子たちにお見せになるのです。

### 1A 山頂の栄光 1-13

#### 1B 弟子に聞く命令 1-8

1 それから六日目に、イエスはペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。  
2 すると、弟子たちの目の前でその御姿が変わった。顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。

新約聖書、また福音書を読む時に、私たちはしばしば「分かった気分」になります。しばしば旧約聖書は難しいという言葉を書くのですが、その言葉を裏返すと「新約聖書は分かるのだけれども」ということだと思えます。けれども、実は福音書は、旧約聖書の続きで、旧約聖書があるからこそ分かる話です。

ここで、「六日目に」という言葉がありますね。事実、六日目にイエス様が三人の弟子たちを連れて、高い山に登られました。旧約聖書において、イスラエルの民にとって最も大きな出来事の一つは、シナイ山における神の現れです。そこに神が天における栄光をもって現れ、モーセがシナイ山に上り、そこで神の教え、律法を受けました。出エジプト記 24 章には、「それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老たち七十人は登って行った。(9節)」とあります。モーセは、アロンとその息子二人、三人を自分といっしょに連れて行ったのです。そしてシナイ山の中腹だったのでしょうか、食事をしたのですが、神の御足が見えるような、サファイアの輝きのようなものが見える中で飲み食いしました。そして、そこから上には従者ヨシュアだけを連れて、一人、シナイ山に登りました。そして、こう書いてあります。「モーセが山に登ると、雲が山をおおった。主の栄光はシナイ山にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。(15-16節)」弟子たちのうちから三人だけを連れて行き、それから六日目に山に登って、おそらくは七日目にご自身の栄光の姿をイエス様はお見せになったのでしょう。

そして、「弟子たちの目の前でその御姿が変わった。」とあります。モーセも主との語らいをもったら、顔が光輝いていたのですが、モーセとイエス様の違いは明らかです。ここで「変わった」という言葉は、メタモルフォシスというギリシア語で、蛹(さなぎ)から蝶へ変態する時の言葉になっています。モーセは、主の栄光を反映させていただきただけですが、イエス様は元々が神の本質と栄光の完全な現れであり、そのお姿を人間のへりくだった形の中に収めておられたのです。そして、「ピリ 2:6-7 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。」そして、「顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。」という変貌のお姿ですが、かつてダニエルに主は、このような姿

で現れました、10 章に書かれています。ここに居合わせた使徒ヨハネも、後にパトモス島で同じように栄光の姿に輝くイエス様に会っています(1:13-16)。

けれども、なぜ、この時に及んでイエス様はペテロたちにご自分の御国をお示しになられたのでしょうか？それは、「苦しみの中にある栄光」を伝えられたかったからに他なりません。ペテロが、イエスが生ける神の御子キリストであると告白しました。そしてイエス様が、十字架の道を歩み、三日目に復活すると言われました。それを、「そんなことがあってはならない」とペテロがいさめましたが、イエス様が「退け、サタン。」と言われました。ペテロにとって、神の御子であられ、キリストであられる方が、ローマの十字架で惨めで、酷い死を遂げられるなんてことは、あってはならないと思ったのです。

しかし、イエス様はこの十字架の死は失敗ではなく、正反対で、神の御心を行う栄光あることなのだということを示したかったからです。十字架の道を進まなければ、神の御心を果たすことはできません。神は、アダムが罪を犯した時以来の、罪に対する贖いを成し遂げなければ、人が人として、神のかたちとしての栄光の座に着くことはできないからです。イスラエルの民に対して、絶えずいけにえの教えを神は与えておられました。牛や羊のいけにえですが、なぜそんなことをしなければならなかったのでしょうか？いつか、神ご自身がご自分の御子によるいけにえを供えられて、それで私たちの罪を赦すご計画を立てておられたからです。イエス様のへりくだりと苦しみの中には、ちょうど蝶が蛹の姿でいるように、神の栄光が隠されているのだということを知るためなのです。そして事実、ペテロは自分の手紙で、キリストのゆえに苦しみにあうことは良いことで、そこには栄光の御霊が留まっているという言葉をもって、迫害の中にいるキリスト者を励ましています。

イエス様が、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて行かれたのは、ここだけではありませんでした。ところで、この三人は漁師仲間でイエス様に会おう前から知り合いの中でした。そして、ヤイロの娘をイエス様が生き返らせた時に三人を連れて来られました。ゲッセマネの園で苦しみ悶えながら祈られた時も、三人をもっと近くに引き寄せておられました。この三つの出来事において共通しているのは、「死」です。ヤイロの娘の死がありました。けれどもイエス様はそれを眠っているだけなのだとおっしゃって、生き返らせました。そう、イエス様の死は死で終わるのではなく、生き返るのだということをおっしゃられるのです。

ところで、この「高い山」ですが、タボル山が伝承としてその高い山だとされ、その山頂にはいくつかの教会が建てられていますが、タボル山は高い山ではありません。そしてタボル山はガリラヤにあり、今、彼らはピリポ・カイサリアにいてガリラヤを避けていたのに、わざわざここに戻って来ることは不自然です。多くの方が、ピリポ・カイサリアがヘルモン山の麓にあることから、ヘルモン山ではないか？と言っています。あるいは、ヘルモン山を除いてはガリラヤ湖の北西にメノン山が最も高いのですが、そこではないか？という人もいます。

3 そして、見よ、モーセとエリヤが彼らの前に現れて、イエスと語り合っていた。

これは驚くべきことです。ユダヤ人にとっては、こんな光景ほど栄誉なことはないと思います。モーセは、神の律法が与えられた最も偉大な預言者であり、ユダヤ人が生きていく拠り所としている神の教えそのものを代表しています。そしてエリヤは、神から離れていたイスラエルに対して、神に立ち返るように預言した人物であり、その後の預言者たちの代表的な存在です。モーセとエリヤの二人をもって、イスラエルの霊的生活は成り立ち、また聖書が成り立っていると言っても過言ではありません。その二人が今、イエス様を中心に語り合っているのです。ルカによる福音書によると、エルサレムで最期の時を果たすことを話していたのですが、ここにはモーセもエリヤもどちらも、イエスがキリストであること、彼らの語った神の言葉の中心であることを証明しているような光景であります。

ペテロは、この見た栄光に基づき、第二の手紙を書いています。「1:16-18 私たちはあなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨を知らせましたが、それは、巧みな作り話によったものではありません。私たちは、キリストの威光の目撃者として伝えたのです。この方が父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、このような御声がありました。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。」そしてヨハネも、その感動をもっと短い言葉で言っています。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。(ヨハネ 1:14)」

4 そこでペテロがイエスに言った。「主よ、私たちがここにいることは素晴らしいことです。よろしければ、私がここに幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」

ペテロは、いつものペテロですね。イエス様が十字架の道を進むことを話された時に、そんなことがあってはならないといさめました。何もしなければよいものの、余計なことを出しゃばってやっています。ペテロのここで考えていた光景は、仮庵の祭りです。荒野の旅でイスラエルの民が天幕、つまり仮の庵に住んでいましたが、主は荒野でイスラエルを守ったことを記念しなさいということで、仮庵の祭りを守ることを命じられました。御国が到来すると、世界は仮庵の祭りを祝うようになることがゼカリヤ書 14 章に書かれています(14:16)。今、ペテロは御国に入ったのだと思いました。とてつもない光景の中で、仮庵の祭りを祝わなければいけないと思ったのでしょうか。

5 彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲が彼らをおおった。すると見よ、雲の中から「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞け」という声が出た。

彼が出しゃばって話している間で、それをまるで無視するかのように光り輝く雲が覆いました。こ

れが主の栄光ですね。神はご自分の栄光を人に分かち合うことはしません。人が出てくる場面はありません。先のシナイ山のことを思い出して下さい、そこに雲が覆ったことが記されていました。そして主の幕屋をモーセが建てた時に、出エジプト記の最後を見ますと、同じような現象が起こっています。「40:34-35 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。」

そして最も大切な言葉がありました。父なる神ご自身の声です。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」は、イエス様が水のバプテスマをヨハネから受けた時にも天からの声がありました。イエス様こそが、父から愛された独り子であります。この方にこそ、神の本質の完全な現れがあります。そしてこれを喜ぶ、という言葉には、メシアにも神が言われたことです、「わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者(イザヤ 42:1)」

そして弟子たちに対して命じられます、「彼の言うことを聞け」。モーセが語っています、そしてエリヤも語っています、けれどモーセもエリヤもキリストのことを証言していたのであり、この方こそがそのキリストです。イエス様はこう言われているけれども、モーセがこういって、エリヤがああいって、ではないのです。イエスが言われているということは、全ての律法と預言者が言っていることであって、要はこの方に聞きなさいということであります。神には言葉があります。神がご自分を啓示されるのに、言葉を持っておられます。けれども、終わりの時には御子こそがご自分を完全に示す言葉になられた、ということです。「ヘブ 1:1-2 神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られました。この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。」

ペテロや他の弟子たちは、ユダヤ教の教師たちによって教えられていることがあり、それがあってイエス様の言われていることがそのまま、素直に聞けなくなる部分がありました。心が鈍くされていきました。そこで父なる神は、はっきりと「彼の言うことを聞け」と言われたのです。十字架に至道、三日目によみがえることについて、彼の言うことを聞けということ。すべてイエス様の言われることを聞け、ということです。私たちが、心の中でいつの間にかイエス様の言われることが、横に置かれてしまうことがあります。しかし、この方の言われることを聞くのです。

6 弟子たちはこれを聞いて、ひれ伏した。そして非常に恐れた。7 するとイエスが近づいて彼らに触れ、「起きなさい。恐れることはない」と言われた。8 彼らが目を上げると、イエス一人のほかには、だれも見えなかった。

これまで、いろいろな人が、神の栄光の姿に触れ、またその声を聞いて、恐れをなしていました。主がシナイ山で十戒を与えられた時に、イスラエルの民は、このままでは死んでしまう、あなたが代わりに神の命令を聞いてくださいとモーセに頼みました。そして、ダニエルが栄光に輝く御子の

姿を見た時に、死んだようになって倒れてしまいました。使徒ヨハネもパトモス島で死んでしまうようになりました。そして、イエス様がここで「起きなさい。恐れることはない」と言われたように、御使いがダニエルを励まし、起こしました。それほど衝撃があります。

しかし、主はその栄光と力に輝く姿で初めには来られませんでした。ここにあるように、人の姿をもって共に住んでくださっていたのです。そのへりくだった姿の中に栄光を隠しもおられたのです。私たちの信仰生活、教会生活というのは、そういうものでしょう。それは、人々が近づくことができるように、へりくだっています。何ら変哲もない姿のままに主はしておかれます。けれども、それは卑しいではありません。教会には聖い御霊が働いています。神の栄光に触れられて、自分の闇というものも、照らし出されます。しかし、終わりの日のように永遠の恥となるような裁きではありません。そこで、神の謙虚や恵みというものを何も起こってはないではないかと侮る人々がいます。神は弱い方ではありません、必ず力をもって裁かれます。

## 2B 先駆者への苦しみ 9-13

9 彼らが山を下るとき、イエスは彼らに命じられた。「あなたがたが見たことを、だれにも話してはいけません。人の子が死人の中からよみがえるまでは。」

イエス様は、まず弟子たちがこのことの意味を悟っていないことを知っておられます。復活の後になってようやくのこと悟ることができるようになることが分かっておられました。ルカによる福音書によると、弟子たちが復活のイエスに出会って、イエス様が初めてモーセから始まって聖書全体から、キリストが苦しみを受けてから栄光に入ることをお話しになりました。復活という出来事が、イエスが神の御子、神ご自身であることが明らかにされたからです。「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中から復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。(ローマ 1:4)」

そしてもちろん、他のユダヤ人には全く理解できないことです。苦しみを経てそれで栄光に入るということは、ユダヤ人の中ではありませんでした。けれども、聖書には、例えばヨセフが苦しみを経てそれでエジプトの総理大臣になりました。ダビデもサウルによって苦しみを受け、それからイスラエルの王となりました。決して、彼らにとって真新しいことではなかったのです。そして、私たちにとっても驚き怪しむべきことにははいけません。ペテロが第一の手紙の中で励ましています。「4:12-14 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思っはいけません。むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歡喜にあふれて喜ぶためです。もしキリストの名のためののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださいからです。」

10 すると、弟子たちはイエスに尋ねた。「そうすると、まずエリヤが来るはずだと律法学者たちが

言っているのは、どういうことなのですか。」11 イエスは答えられた。「エリヤが来て、すべてを立て直します。12 しかし、わたしはあなたがたに言います。エリヤはすでに来たのです。ところが人々はエリヤを認めず、彼に対して好き勝手なことをしました。同じように人の子も、人々から苦しみを受けることになります。」13 そのとき弟子たちは、イエスが自分たちに言われたのは、バプテスマのヨハネのことだと気づいた。

今、言いましたように、弟子たちには多くの疑問がありました。律法学者から挑戦を受けたり、情報や知識が混乱していたのです。

律法学者たちが言っていたのは、マラキ 4 章のことです。主が来られる前に、エリヤが来るということです。「4:5-6 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである。」イエス様は、その通りだと言われています、「エリヤが来て、すべてを立て直します。」と言われていますね。エリヤは、イエス様が再び来られる前にやってきて、立て直すのです。

けれども、マラキ書にはもう一人の、主が来られる前の先駆者について話しています。「3:1 見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼はわたしの前に道を整える。」彼自身はエリヤではありませんが、エリヤのように人々の心を主に向けさせる道備えをします。バプテスマのヨハネをエリサベツがみごもることを告知した、御使いガブリエルは、ヨハネがエリヤの霊と力によって来ることを伝えました(ルカ 1:17)。バプテスマのヨハネ自身が、ユダヤ人からあなたはエリヤか？と尋ねられた時に、はっきりと「違います」と答えています(ヨハネ 1:21)。エリヤ本人ではないが、エリヤのような主への立ち返りのために用いられる先駆者であり、それでイエス様は、「エリヤはすでに来たのです。」と言われました。

そして、これだけ栄光と力に輝くすばらしい御国の時代が来ようとしているのに、人々は好き勝手なことをするという現実を語っておられるのです。ヨハネは、ヘロデ・アンティパスによって捕まえられ、その妻ヘロディアによって斬首されました。ユダヤ人指導者もヨハネを受け入れていません。先駆者に対してこんなことをしているのだから、人の子に対しても同じことをするのだとイエス様は警告されます。ここで、栄光があっても、それが人々から受け入れられるわけではなく、むしろ拒まれるのだという、罪の現実を話しておられるのです。弟子たちも、バプテスマのヨハネのことをイエス様が話していることに気づきました。

## **2A 麓の悪霊 14-21**

### **1B 不信仰の時代 14-18**

14 彼らが群衆のところに行くと、一人の人がイエスに近寄って来て御前にひざまずき、15 こう言った。「主よ、私の息子をあわれんでください。てんかんで、たいへん苦しんでいます。何度も火の

中に倒れ、また何度も水の中に倒れました。16 そこで、息子をあなたのお弟子たちのところに連れて来たのですが、治すことができませんでした。」

山の上で、御国の栄光を見て、そのすばらしい体験をしたのに、その麓では悪霊によって苦しめられている子がいました。しかも、弟子たちところに言って直してほしいと言ったのに、治せません。このことも、シナイ山の時と似ていると思いませんか？モーセが四十日四十夜、主から律法を与えられて主との時間を過ごしましたが、その麓で起こったのは、そう、金の子牛事件です。この落差には驚きます。しかし、これは現実起こります。山の上での神との体験から、谷での悪霊との体験、罪との対峙という落差です。パウロも、似たような体験をしました。第三の天にまで、パラダイスにまで引き上げられる体験をしながら、肉体に戻ったら、肉体の棘が与えられていました。サタンからの使いで、取り除いてくださるよう願ったけれども、代わりにイエス様は、「わたしの恵みは、あなたに十分である」ということ、「あなたの弱さに、キリストの力が働く」ということ。御国のすばらしさがあるということは、サタンの国は猛烈に対抗しているので、この落差も現実として経験します。

17 イエスは答えられた。「ああ、不信仰な曲がった時代だ。いつまであなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまであなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」18 そして、イエスがその子をお叱りになると悪霊は出て行き、すぐにその子は癒やされた。

ここには、群衆がいました。そして他の福音書には律法学者たちもいたことが書かれています。そしてもちろん、残りの弟子たちもいました。そして悲壮的になっているこの息子の父親がいます。そこに広がっている空気が、イエス様が言われている「不信仰な曲がった時代」です。イエス様は、弟子たちにご自分の権威を授けていました。悪霊どもを制する力を与えておられました。けれども、それが忘れられていたこと、そのことに対する落胆の思いをイエス様は言い表しておられます。信仰者に対して、キリストにあるあらゆる霊的祝福が備えられているのに、その影響力を周囲に及ぼしていない状態は、主は、「不信仰な曲がった時代」として嘆いておられるでしょう。

残されていた弟子たちは、おそらくイエス様に選ばれた三人の弟子たちのことを妬んだでしょう。次の章 18 章以降で、そのことが表面化します。そしてイエスご自身が物理的におられなかったことで、自分のことだけに関心が集まって来たことでしょう。祈らなくなり、霊的な鍛錬を怠っていたことでしょう。それで、このような悪の力と出くわして、用意ができていなかったのです。私たちに対する警告です。霊的に眠ってしまう事に対する警告です。

## 2B からし種ほどの信仰 19-20

19 それから、弟子たちはそっとイエスのもとに来て言った。「なぜ私たちは悪霊を追い出せなかったのですか。」20 イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに言います。もし、からし種ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこに移れ』と言えば移り



ます。あなたがたにできないことは何もありません。」そして21節に、「ただし、この種のものは、祈りと断食によらなければ出て行きません。」とあります。

午前礼拝の説教をぜひ、後で聞いてください。そこで信仰についてこの箇所から教えました。信仰というのは、自分たちの能力ではなく、神の能力の現れであること。だから、神の思いと自分の思いが一つになる、調和することで全てが決まります。周波数が合いさえすれば、音が聞こえるように、心が一つになりさえすれば神がその全能の力を表します。だから祈りが必要です。断食とは、祈りに専念するための方法です。祈りによって、初めて自分では何もできない、神のみがすべてできるのだという立ち位置に留まることができます。

### **3A ガリラヤへ 22-27**

#### **1B 人の子の死 22-23**

22 彼らがガリラヤに集まっていたとき、イエスは言われた。「人の子は、人々の手に渡されようとしています。23 人の子は彼らに殺されるが、三日目によみがえります。」すると彼らはたいへん悲しんだ。

ここで、ようやくガリラヤに戻って行っています。これまで、退くという言葉が14章、ヘロデがバプテスマのヨハネを殺した時から出てきて、イエス様はユダヤ人やヘロデが支配するところから、なるべく離れる行動を取っておられました。そして、16章ではざっと北上して、ユダヤ人が極めて少ない、異邦人がいるピリポ・カイサリアに行きました。そして高い山に登り、それから降りて来て、今、ガリラヤに戻ってきています。イエス様は改めて、ご自分の使命を比喻でも、隠喩でもなく、はっきりとお語りになりました。人々に殺されるが、三日目に甦るということです。

弟子たちは、イエス様が殺されるというところまでは、ようやく聞き取れるようになったようです。ペテロは、そんなことはあってはならないと諫める過ちを犯しましたが、イエス様が何度も言うのでそこは聞く耳を持つようになったようです。けれども、それで納得したということとは別の話です。しかし、そこがイエス様の話ではありません。イエス様は、「よみがえる」と言われているのです。殺されるけれども、三日目に甦るということが主が言われたかったことです。しかし、そこは彼らの心には全く入っていません。興味深いことに、敵はそのことをわきまえていました。マタイ27章に、イエス様が死なれてから、ピラトのところに行き、「『わたしは三日目によみがえる』と言っていたのを、私たちは思い出しました。」と言って、そこにローマの番兵を付けて、弟子たちが墓からイエスを盗みだすことがないようにしてほしいと要求しています(27:63)。不信者や敵のほうから、三日目に甦るという言葉を知っているのに、肝心の弟子たちがその言葉さえも全く受け入れていません。「殺される」という言葉を聞いて、それで頭が真っ白になってしまったのでしょうか。それで彼らは、大変悲しみました。

## 2B イエスらしい納税 24-27

24 彼らがカペナウムに着いたとき、神殿税を集める人たちがペテロのところに近寄って来て言った。「あなたがたの先生は神殿税を納めないのですか。」

彼らがガリラヤに戻り、そしてカペナウムのペテロの家に戻りました。この逸話は、四つの福音書のうちマタイ伝にしか出てこないのですが、マタイが取税人だということが理由だと思えます。さすが、税金については関心があったのでしょう、マタイは書き残しています。

神殿税ということですが、これは出エジプト記 30 章 11 節以降に書いてあります。イスラエル人がすべて、人口登録にあたり、自分の魂の償い金を主に納めないといけないということが書いてあります。これは、まさに自分自身が滅びなければいけない罪人であるのに、神が罪の贖いをしてくださったことを、償い金、あるいは贖い金で示すものです。イスラエルの家にいるということは、神が罪の贖いをしてくださったことを覚えて礼拝する民であるということを示しています。人口調査の度に半シケル(5.7 ｼ)を支払いますが、これは幕屋と礼拝を維持するための財源となりました。貧しい人も富んだ人も、これは自分の魂の救いに関わることで、無差別に同額を支払います。ここで彼らが、神殿税を納めないのですか？と問い詰めているのは、ユダヤ教のラビであるイエスが、まさか律法を破ることはないですね？と問い詰めているのです。

しかし驚くのは、次を読めば分かりますが、イエス様にはその税を納める財力がなかったということです。それだけお金がなかった、貧しかったのです。先に、イエス様がパリサイ人、サドカイ人のパン種に気をつけなさいと言われた時に、弟子たちがパンを持ってくるのを忘れたことを議論していましたが、そうしたことを議論しなければいけないほど、かなり経済的に苦しかったのだと思われれます。しかし、そこでイエス様は必ず備えられる方であることを示されます。

25 彼は「納めます」と言った。そして家に入ると、イエスのほうから先にこう言われた。「シモン、あなたはどう思いますか。地上の王たちはだれから税や貢ぎ物を取りますか。自分の子たちからですか、それとも、ほかの人たちからですか。」26 ペテロが「ほかの人たちからです」と言うと、イエスは言われた。「ですから、子たちにはその義務がないのです。」

非常に興味深いですね。イエス様は余裕しゃくしゃくに、本当は納める必要はないのだと言われます。王たちは子どもには税や貢物は課しませんが、同じように自分は神の家については子の身分であり、その弟子たちも、云わば養子縁組だから、支払う必要はないのだということです。ヨハネ 2 章における、宮清めのところを読むと、イエス様が言わんとしておられることがよく分かります。イエス様はこう叫ばれました。「わたしの父の家を商売の家にしてはならない。(16 節)」これをユダヤ人指導者が聞いて怒ったのですが、神を礼拝するところを、自分のお父さんが礼拝しているところとしたことです。つまり、自分は礼拝者ではなく、礼拝されるほう、父とご自分を同等のところへ置いたからです。

27 しかし、あの人たちをつまずかせないために、湖に行って釣り糸を垂れ、最初に釣れた魚を取りなさい。その口を開けるとスタテル銀貨一枚が見つかります。それを取って、わたしとあなたの分として納めなさい。」

イエス様は、「あの人たちをつまずかせないために」と言われています。このことによって、大きなスキャンダルになって、イエス様の働きに支障が出てはいけないということです。それほど大事なことでないことで、自分たちが大事にしていることの妨げになるのであれば、それを行っておいたほうがよいということ。この姿勢は、納税もそうですし、いろいろな社会的責任について言えるでしょう。パウロは言いました、「ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えない者になりなさい。(1コリ 10:32)」

そして、「スタテル銀貨一枚」はユダヤ人の通貨の一シェケルに相当します。つまり、ペテロの分とご自身の分です。それを、なんとペテロに釣りをさせて、そこで魚がそれを口に加えているからそれを持って行きなさいと言われているのです。そして事実、そうなったことでしょう。ガリラヤ湖に置くと、湖畔のレストランには「聖ペテロの魚」というメニューがあつて、魚料理を楽しむことができますが、口にコインを加えさせてみんな写真を撮ったりします。

ここから何が分かるでしょうか？ イエス様たちは、生活の必要はかなりぎりぎりだったということです。けれども、豊かでした。イエス様は、人々の欲は満たすことはなかったけれども、必要は満たされました。貧しいのですが、必要を満たされるので事欠くことはなかったのです。そこには、イエス様の被造物をも支配する力があることが分かります。魚をも支配されている。そしてペテロが漁師だったということも使って、それで魚をも動かして硬貨、しかも二人分の神殿税に相当する額の硬貨を加えさせるようにさせておられます。主は全てを造られ、支配し、そして神のかたちに造られた人も、地を支配するように造られていました。神の権威が授けられて、そのように支配することができるようになるというのが、御国の姿です。

御国において、神の栄光の現れ、神の本質そのものであられるイエス様が、へりくだった姿で、けれどもその力と権威を、人々に仕える形でお用いになっています。これが、キリスト者の姿でもあります。イエス様についていく人々には、イエス様が共におられます。私たちには、多くが与えられていないかもしれません。いつもぎりぎりかもしれません。けれども、主が敢えてその弱さを身にまとうようにされました。それは、人々が近づき、神を知ることができるようにするためです。そして、その弱さにご自分の力を十二分に働かせて、必要を満たすことによって、御国を広げます。